広島の観光における被爆者証言活動の意味：切明千枝子さんの修学旅行者への対応経験を中心に
What Hibakusha Testimonies Mean to Tourism in Hiroshima: with the Focus on Ms. Chieko Kiriake's Experience of Giving Talks to Students on School Trips

桐谷　多恵子
Taeko Kiriya

要旨：本稿は現代の広島観光の特徴の一つである平和をテーマとした教育旅行について、とくに「広島修学旅行」を推し進めた江口保と、彼の要望に応えて被爆証言活動を始めた一人の被爆者・切明千枝子さんとの応答関係を中心に考察したものである。「広島修学旅行」とは修学旅行生徒が広島を訪れた際、被爆者の証言を聴くというスタイルである。この進展の背景には江口と彼に応えた被爆者たちの努力とがあったが、被爆者たちも最初からスムーズに彼の活動を歓迎していた訳ではなく、様々な葛藤があった。その乗り越えの上に現在まで「広島修学旅行」は継続している。この点に現代広島観光における被爆者の「ホスピタリティ」を求めることができる。

キーワード：広島観光、広島修学旅行、江口保、被爆者、ホスピタリティ

Abstract: This article discusses peace education trips, which is one of the characteristics of tourism in modern Hiroshima. In particular, it focuses on the relationship between Tamotsu Eguchi, who promoted "Hiroshima School Trips", and Chieko Kriake, an A-bomb survivor, who started talking about her experience of the A-bombing in response to Eguchi's request. On a "Hiroshima School Trip", students listen to the testimonies of A-bomb survivors. Efforts by Eguchi and A-bomb survivors who supported him promoted this type of school trips. However, the A-bomb survivors struggled with dilemmas and could not fully support his activities at the beginning. As they overcame those issues, the "Hiroshima School Trip" has continued up until day. There, we can see the "hospitality" of A-bomb survivors in contemporary Hiroshima tourism.

Keywords: Tourism in Hiroshima, Hiroshima School Trip, Tamotsu Eguchi, A-bomb survivor, Hospitality

1. はじめに

現在の広島観光において、一般的にまず挙げられる観光地は二つの世界遺産、原爆ドームと宮島であろう。広島市内に話を限定すれば原爆ドームであり、関連して平和記念公園や広島平和記念資料館である。これらを対象とした旅行は原爆や平和というテーマ性をもっ

た旅行である。これは個人や私的集団で訪れる場合も多いであろうが、学校が行う教育旅行（とくに修学旅行）としての側面も非常に強い。学校から広島への教育旅行は1970年代中盤から増加するのだが、その際、特徴的なのが「広島修学旅行」と呼ばれる旅行スタイルである。詳しくは後述するが、「広島修学旅行」とは、端的に言えば、教育旅行で広島を訪れた学校の生徒の集団が一人の被爆者の話を（例えば1時間程度）傾聴することをプログラムに組み込んだ旅行スタイルである。「広島修学旅行」については山口誠の先行研究がある[1]。山口は「広島修学旅行」スタイルの提唱者であり実践者であった中学教師・江口保の活動を丁寧に追いかけており、このテーマでの基本文献と言えるが、江口が協力を呼びかけた被爆者の側がどのように応じたのかについてはあまり検証されていない。

本稿では、江口から協力を依頼された1人の被爆者、切明千枝子さんの経験を検討し、その視線から「広島修学旅行」の姿を描き出すことを目的とする。その際、観光においてしばしば用いられる概念「ホスピタリティ」について、被爆者が江口や学校生徒に対して示した応答から、その内容を再検討することも併せて目的とする。

2.「広島修学旅行」にいたる広島観光の歴史的概略

2-1. 戦前の広島観光

本章では「広島修学旅行」の歴史的位置づけを把握するために、昭和戦前期から戦後にかけての広島観光の概略を確認する。

1933年7月、広島観光協会が発足し、1935年8月には広島県観光協会が発足した。両者はそれぞれ広島市役所と広島県庁に事務所を置いていた[2]。1936年に広島観光協会が刊行した観光パンフレット『ひろしま』で、冊子を開いてすぐに紹介されているのは「聖跡大本営跡」と「聖跡旧御便殿」である。日清戦争（1894～95年）の際、広島（宇品港）は出撃の拠点となっただけでなく、戦争指揮の最高機関である大本営が広島城の中に設置され、明治天皇がそこで戦争指揮を執った。また戦争中に帝国議会が広島市内に設置された臨時の仮議事堂で開催されたが、その際、天皇が休憩した建物がいわゆる「御便殿」である。日清戦争後、この大本営と「御便殿」が天皇関連の史跡（聖跡）として保存され、観光地となった。先の冊子はまた、「西日本第一の雄都こそ、実に我が広島市である」、「陸の軍都」等の表現を用いて広島市がいかなる都市であるかを位置づけている。日清戦争の「聖跡」であることや「軍都」であることが、広島市の自画像であり、観光においても一つの売りとなっていた。

2-2. 戦後の広島観光

このような「軍都」広島は、1945年8月6日の原子爆弾によって壊滅的被害を受けた。そしてそこからの復旧もままならぬ内に日本は敗戦を迎えた。日本の敗戦という事態は、

戦後の広島市の方向性にも大きな影響を与える。戦後初代市長（最後の官選市長）である木原七郎[3]が1945年12月6日に行った「昭和20年市長施政方針」はとても興味深い認識を示している。見てみよう。

> 原子爆弾の一撃に依りまして美事に軍都広島を破却一掃致し、此の一撃は市民の軍国主義を根絶せしめたと同時に広島市が軍都と正反対の平和学術教育の都市として再出発すべき絶好の機会を与えられた、斯う云ふ中国新聞紙上の批評に対しましても私も全然共鳴するもので、此の方面の計画にも大いに努力すべきであります[4]。

このように早くも1945年12月の段階で木原は、戦後の広島市が「軍都」ではなく「平和学術教育の都市として再出発すべき」との認識を示していた。このことは、敗戦さらに米国による占領行政という状況下で「軍都」としての復旧がありえないという認識の裏返しであろうと推測されるが、それはともかく、この「平和」都市としての広島市という木原の都市（の自画）像は、その後の濵井信三はじめとする広島市長たち、そして広島市の基調となった。1948年版の『広島市勢要覧』でも、「人類の恒久平和を祈念するための陳列室や平和塔を有する記念館を建設して平和廣島の「シンボル」とする計画である」と述べられ、「平和廣島」は戦後の広島市の路線となった。

広島の観光に目を移すと、1947年3月には広島観光協会が、同年11月には広島県観光協会が再出発した[5]。また1948年版『広島市勢要覧』には、「本市は原爆のため観光資源も観光施設も壊滅したのであるが、廃墟の中から吾々の新しい観光資源が取り上げられた。即ち原爆記念保存物である」[6]と記され、原爆関係の諸物が観光資源として位置づけられている。さらに1949年の『国際観光』では、広島市長・濵井信三が「広島市観光事業の本質と概観」という文章を載せて、「三、市観光事業の本質」において「廣島観光の主たる対象は何かと言えば、それは平和記念都市の視察であり、又建設途上にある平和記念都市の視察研究であろう」と述べている。「平和記念都市」とは、1949年8月6日に施行された、広島市のみを対象とする特別法「広島平和記念都市建設法」が掲げる目標である。このような都市の自己像は、例えば広島市観光協会が1955年頃に刊行したパンフレット『広島の観光と見学』では次のように描写される。すなわち、広島市の歴史として「軍都」には触れられず、「中国第一の大都会」であった広島が原爆によって壊滅し、市民の涙ぐましい努力の結果、復興した、という説明である。

さてその「平和都市」広島の観光施設としては、広島平和都市記念碑（原爆死没者慰霊碑の正式名称）、平和記念資料館、平和記念館（いまの平和記念資料館東館の前身）といった「平和」の名の付く都市の施設が観光パンフレットを賑わしている（このほか市内にあるカトリック幟町教会には「世界平和記念聖堂」が建設された）[7]。「平和」を冠してはいな

いが、もちろん原爆ドームも重要な関連物である[8]。

「平和都市」としての広島市あるいはその具体的観光資源としての原爆関連諸施設という意味付けは、その後の戦後史を通じて（結果的に）継続・発展されてきた。そのことは、例えば広島平和記念資料館の入館者数の増加からも確認することができる[9]。広島平和記念資料館への入館数は1970年代後半から急激に増えており、日本の平和博物館では最も入館者数が多い。広島平和記念資料館は平和記念公園に立地することから、この数は平和記念公園に訪れた人の数でもあり、入館せずに平和記念公園を訪れる人もいることを考え合わせるとその数はさらに多くなる。広島市の「平和」観光はこのような展開を経て現在に至っている。

3.「広島修学旅行」

それでは広島市の観光動向の流れの中で「広島修学旅行」を捉えてみよう。被爆者証言をとくに大きな特徴とする平和学習としての教育旅行である「広島修学旅行」が開始されたのは1970年代後半である。広島への教育旅行がこの時期に進展した背景には、1975年3月に岡山以西まで山陽新幹線が延伸し、移動が容易になったことがある。それ以前の広島への教育旅行は中国四国地方等の近県からが主であったようだが[10]、新幹線の延伸で東京からも広島への教育旅行が可能になったのである。

その「広島修学旅行」を開拓していったのが江口保という1人の都立中学校教員である[11]。江口は1928年長崎市生まれで、戦後上京して東京理科大学の夜学に通いつつ葛飾区の中学校教員として勤め始めた。彼が葛飾区立上平井中学校の教員となったころ、同校の修学旅行の行先は京都等の関西方面であった（マンネリを避けるため東北を訪れた例もある）。当時、東京都教育委員会の規定により公立中学校の修学旅行は72時間、丸3日間に収めることになっており、そのことに配慮した修学旅行日程であった。それが山陽新幹線の延伸により、都の規定の範囲内で広島に修学旅行に行くことが可能になった。実際、1975年、東京都のある中学校が広島への修学旅行を行っており、江口もこの事例を知って注目していた。そして1976年から江口たち上平井中学校も広島への修学旅行を敢行するに至る。江口の取り組みの特徴は、広島での研修として、生徒を小グループに分け、平和記念公園内の原爆死没者慰霊碑前で被爆者の証言を聞くというスタイルにあった。またこのため江口は事前に広島に通い、生徒たちに話をしてくれる被爆者を直接探し回った。江口のこのスタイルは「上平井方式」と呼ばれ、新聞に報道されたことで有名となり、「広島修学旅行」のモデルとなったのである。江口はその後、定年を前にして中学教員を退き、広島市に移住して、1987年から1996年まで「ヒロシマナガサキ修学旅行を手伝う会」という活動を行い、「広島修学旅行」の発展に寄与した。

なお、「広島修学旅行」に江口がこだわった背景には、彼の戦争体験・原爆体験もあるか

もしれない。先述のとおり江口は1928年に長崎市に生まれ、長崎県立瓊浦中学校を卒業後、同校で軍事教練の助手として活動していた。そして17歳のとき、長崎への原爆投下により体中にガラスが突き刺さる瀕死の重傷を負った。父の発見により一命をとりとめ、父母の郷里の佐賀県に運ばれて療養生活を送るが、原爆被爆者であることを理由に村の人々からいじめや差別を受ける経験をした。療養生活の後は佐賀師範学校へ入学、神集島（現在は佐賀県唐津市）に1年ほど赴任した後、さらに勉学を続けたいと叔父を頼って上京したのである。彼自身は原爆体験を語らなかったが、原爆体験には特別な思いがあったはずである。

4.「広島修学旅行」と被爆者・切明千枝子さんとの応答をめぐって

江口保の働きかけによって、幾人もの広島の被爆者が自らの被爆体験を10代の若者たちに向かって話すことを引き受けた。とはいえ、そこには当然、複雑な心境があったことが十分に推察される。被爆者の心境、あるいはそれぞれの置かれた公的私的な関係性は多様であり、一括りにはできない。本稿では、江口の働きかけに応じて語ることを始めた1人、切明千枝子さん[12]を取り上げたい。

4-1. 切明さんの略歴と被爆体験

江口との関わりの話に入る前に切明さんの略歴と被爆体験をかんたんに紹介しておこう。切明さんは1929年に広島市内で生まれた。2022年11月16日には93歳の誕生日を迎える。1931年に「満州事変」がひき起こされ15年戦争が始まるが、彼女の戦前の生はまさに「戦争にどっぷり浸かって」（切明さん）生きてきたと言える。1945年8月、彼女は広島県立広島第二高等女学校（以下「第二県女」と略す）の2年生であり、学校から遠くない皆実町のタバコ工場に学徒動員されていた。（原爆が投下された）6日当日は、足を痛めていたため、工場での朝礼が終わった後に診療所へ向かい、その途中で被爆した。被爆した場所は爆心地から1.9キロ離れており、倒壊した建物の下敷きになったものの自力で這い出ることができた。頭にガラスがいくつも刺さるケガを負いながらも、必死に母校へ戻った。

母校で同級生や先生の何人かと無事であったことを喜び合ったのもつかの間、昼過ぎになると爆心地から1キロの距離で建物疎開の作業に動員されていた下級生たちが続々と学校へ戻ってきた。皆、顔に大火傷を負い、腫れ上がって、誰が誰だか識別できないような重症であった。急遽、学校にいる人たちで救護に当たることとなった。原爆で壊れかけていた学校の教室は、間もなく負傷者で溢れていき、やむなく廊下に負傷者を寝かせていったがそれでも溢れてしまい、ついには運動場の木陰にも負傷者を寝かせていった。治療といっても、救急袋に入っている火傷用の油薬はすぐになくなり、調理用の天ぷら油を探しだして患部に塗っていった。そのうちに切明さんたちの目の前で「おかあちゃん、痛いよ、助けて」と泣きながら、ひとりまたひとりと負傷者が亡くなっていった。その光景は「地

獄のよう」であったという。夏の暑い時期なので放っておけないと、教員の指示で、運動場に人間 1 人が横たわれるくらいの浅い穴を掘り、集めた材木を下に敷き、遺体を乗せて油を入れて火葬した。「人間が焼けて、骨になるまでの悲惨な状態は言葉にできません。胃や腸が破裂するパンパンパンと（いう）大きな音がして、手足も動くのです。私がびっくり仰天していると先生から「見るな！」と言われました」（切明さん）。しかし、彼女は身体が金縛りのようになって目を背けることができず、一部始終を目撃してしまった。綺麗な遺骨が残っていることが確認できたとき、「金縛りが解けて」、涙がボロボロと流れたという。そして、泣きながら遺骨を拾い、名前と亡くなった日付を書いて、次から次へと校長室の大きな机の上に遺骨を並べていった。

しばらくして、亡くなった生徒の親が捜しに学校までたどり着き、彼らは我が子が骨になっているのを見てその場で泣き伏した。切明さんたち生き延びた生徒は、「生き残ってしまったことが申し訳ない思いがして、廊下の陰に隠れて、泣いていた」という。平常時ではあり得ない状況を 15 歳の少女が体験してしまっていた（彼女には「友達を焼いた日」と題された、当時の状況を描いた絵がある）。一緒に遊んでいた後輩たちが原爆で瀕死の重傷を負う中、彼女は懸命に救護を行い、看取り、自らの手で火葬したのであった。

原爆被爆から 1 か月が過ぎた 1945 年 9 月、切明さんの体調は著しく悪化した。まず髪が抜け始め、歯茎からの出血、血便が出て、身体に紫色の斑点が表れ、高熱に苦しめられた。そして、身体の不調と共に精神的にも追い詰められていったという。彼女は、その後、両親の必死の看護で 3 か月にわたる闘病生活を乗り越え、生き抜いた。しかし、その後も心と体の傷は癒えることはなかった。あの時、「なぜ自分は生き残ってしまったのか」、「生き残るよりも皆と一緒に死んだほうが良かったのではないか」、そのような生き残ったうしろめたさにさいなまれたという。また、原爆に焼かれ、熱線と爆風で無惨な大怪我を負った後輩たちの「地獄絵」が頭から離れず、「被爆体験を思い出すことがとても怖かった」。「思い出すだけで、胸が苦しくなって息ができないような感覚になり」、「逃げだしたくなる気持ち」に襲われたという。いわゆるトラウマや PTSD（心的外傷後ストレス障害）の症状である。切明さんは、長い間、生き残ってしまったという思いに苦しめられたのである。

4-2. 江口保との出会い

江口保との出会いは被爆からおよそ 30 年ほど経った 1975 年頃のことだった。江口が「広島修学旅行」の準備のために広島を訪れていたのだが、彼女の母校・第二県女の原爆慰霊碑の存在を知った江口が、戦後は廃校になっていた第二県女の関係者を人づてにたどってやってきたことがきっかけだったいう。東京から訪ねてきた江口から修学旅行生に体験を話して欲しいと初めて頼まれた時、切明さんは「とてもできない」と思ったという。江口が何度訪ねてきても「断って断ってね……」、被爆体験を思い出して「考えるだけで、恐ろしくて、苦しい気持ちになるんですよ」。

江口が切明さんに依頼に訪れた際の様子について、やや長くなり、語りに重複も含まれるが、切明さんの証言を紹介しよう（以下の切明さんの発言の引用はすべて桐谷による切明さんへの聞き取りによる。発言末尾に聞き取り日を示す）。

本当はね、（江口先生は）長崎に連れて行きたかったみたいなんですよ。ところが、長崎はあまりにも遠くて、東京からだと中学の旅程の日程ではとても無理だということになって、それで、あの、江口先生ご自身が長崎の被爆者でいらっしゃるんですよ。だから、どうしても、本当はお連れになりたいのは長崎だったんですけどね、それはとても東京からの中学校の日程では無理、ということになって、広島には何にも手づるもなかったみたいなんですよね。広島なら新幹線も着いたし、なんとか広島なら修学旅行の中学生の日程でも行き帰ることができるということに気づかれて、で、それこそ、手づるも何もないのに、広島にいらっしゃって、被爆者の慰霊碑があちこちに建っているんですよね、慰霊碑を訪ね歩かれて、その慰霊碑の管理をしている関係者は誰だということを探し歩いて、私の母校の慰霊碑にもたどり着かれて、そこの町内会の会長さんのところで、これを管理しているのはどこだというんでね、学校名は彫り込んであるんだけど、学校そのものはもうないですからね、その時にはもうなかったですからね、で、そのご町内の町内会長さんのところに訪ねられて、それで私がたまたま同窓会の委員をしていましてね、その時はまだ同窓会という動きはあったので、新谷さんというひとがいつも老人会で活動してくださっていた町内会長さんで。

（江口先生は）新谷さんに私の住所をお聞きになったみたいで、わたくしのところに訪ねてこられたんですよ。それで、初めてそこでお目にかかって。それで、「慰霊碑に子どもを連れていきたいので慰霊碑にまつわる、どういう人が祀られているのか、子どもたちに聞かせて欲しい」と仰ったんです。でも、わたしはね、「よう話せません」ってね、逃げたい、忘れたい、ばっかりでね、「生徒さんの前でそんな話はできません」ってお断りしてね。（2018 年 10 月 20 日聞き取り）

読んで明らかなとおり、当初、切明さんは江口の依頼を断っている。その後も切明さんは何度も依頼を断っていたのだが、江口に対して申し訳ない気持ちもあり、第二県女の恩師に相談した。

それで、その時はまだね、私の女学校の時の恩師たちがね、何人かまだご存命だったんですよ。先生にそのことを話したら、「あなた何を言ってるのよ、せっかく訪ねてきて、「話して欲しい」と言っているのに断るなんて。あなたが断ったなら、私が引き受けます！」ってね、ご老体の先生が仰ってくださったの。有田先

生というんですけどね……。で、そのことをまた江口先生にご連絡をして。同窓生の方がみんな後ずさりでね。「話して」って頼んでも「いや、いや、だめ、だめ」って逃げるんですよね。そのことを（恩師の）先生に相談したら、先生が、もうお歳を召していたんだけど、「あなたたちが話さないなら、私が話します」って言ってくださったの。それで、有田先生という先生が…。その時はね、女性の先生でしたが、宮島のね、厳島の中学校の教頭先生しとったんですよ、女性の校長なんていない時代にね、教頭だなんて、男性しか管理職がいない時代に、広島で初めてじゃないですかね、女の方で教頭先生になられたっていうのは…。今はもう、教頭、校長、女の人はたくさんおられますけどね、当時は男の人だけが専任みたいな時代で、女の人が上にいけるような時代ではなかったんでね…。その先生は厳島の宮島中学校の教頭先生になっておられたので、その先生に相談したら、「あなたたちが話さないなら、私が話します」っておっしゃって…。それで、わざわざ宮島から来て、江口先生の学校…、上平井中学校っていう葛飾のほうの学校でございましたがね、そこの生徒さんに教え子の最期をね、話してくださったんですよ。私たちも先生だけを行かせるわけにはいかない、ってことになってね、先生のお付きみたいなかたちで何人かの同窓生が付いて行って、生徒さんたちと一緒に先生の教え子の最期をね、話しをされるのを涙ながらに生徒さんたちと聞く、っていうのが何年か続いたんですよ。（2018 年 10 月 20 日聞き取り）

この証言から経緯をまとめると、まず江口が訪ねて証言を依頼したが断り続け、その状況を第二県女時代の恩師・有田智恵子に相談したところ、卒業生が話さないならば自分が話すと証言活動を引き受け、同窓生たちは原爆当時のことを話すことができる人がいないため恩師に任せて、恩師の「お付き」というかたちで江口の活動（修学旅行生たちに証言活動を話す）と関わることになった、ということになる。最初は、生徒に向かって話す恩師の証言を泣きながら聞くということが彼女の参加の仕方であった。

4-3. 級友とチームを作って話す

ところが、恩師・有田智恵子が高齢もあり直接に語ることができなくなった。このことが大きな転機となっていく。切明さんの証言を続けよう。

そのうちに（有田）先生も退職なさって…、退職なさっても、1、2 年は出てくださっていたかな…。お病気になられてね、それで「私は被爆証言をすることはできないから、もし来年、生徒さんたちが来たら、これを聞かせてやってくれ」と言ってね、カセットテープを渡されたんですよ。あの頃、カセットテープというのが流行っていたんですよ。カセットにご自分の声を吹き込まれて、それでわ

たくしに託されたの。私はそのカセットテープと（持ち運び式カセット）デッキをね、預かって、次の年に上平井中学校が来た時に、それを持って行って、先生はご病気でもう話すことができないので、代わりにこちらを聞いてください、って言ってね、そのカセット（デッキ）のね、ボリュームをいっぱいに上げてね、生徒に聞いてもらったんですよ。ところが、あの（第二県女の）慰霊碑がある横には国道 2 号線があって、自動車は通るわね、賑やかで、その上、先生はご病体のなかで話されていて、声が低い…、低いお声でね、話していらっしゃるから…、私は分かるんですよ。何度も話を聞いているから。それを初めて聞く中学生には何が何だか聞き取れなかったらしいの！それで、また江口先生が訪ねてこられて、「有田先生がね、せっかくカセットテープに吹き込んでくださったんだけど、お声も低いし、まわりも騒がしいでね、生徒にはなんのことやら分からなかったらしんです」って言って、「どうか、同窓生のかたで、肉声で聞かせてやってくれないか」って言ってね、まあ、両肘ついてね、畳の上でね、頭を下げて頼んでこられたの！

（桐谷：土下座のような感じで頼まれたんですか？）

そうそう、私の家で、畳の上でね、手をついて、両肘ついてね、ほんとに土下座するような感じで頼んでこられたんですよ！「頼みます、頼みます」と何度も頭を下げられてね、とうとう私も「それなら、もういっぺん、同窓生とも、生き残ったひとたちと相談して、なんとかね、なるように考えてみます」って言って、帰っていかれたんですけどね。それで、生き残りの同窓生……、あの頃はまだ 13 名おりましたんでね、集まってもらって、相談ですよ。そしたら、「私はダメ」「私はダメ」「あなたお願い」って押し付け合いになるんですよね…。だけど、どうにかしなきゃいけない、って思ってね、先生を引っ張り出すのも無理だってなってね、それで 3 人ぐらいでチームを作ってね、「3 人で形式に話をしよう」ってことになったんですよ。

（桐谷：順繰りで回していくという形にしたということですか？）

そうそう。3 人で…チームを作って。1 人が戦前の廣島の話、原爆の前の話をして、もう 1 人が原爆の当日のことやら、その、下級生の最期のことを話す。それで最後に、広島はね、核廃絶と平和を目指す街になっていったんだ、というような流れをね…、チームを作ってね、話すってことをやってたの！

（桐谷：そうだったんですね！）

そうなんですよ。そしたら、そのうちに同窓生たちも 1 人欠け 2 人欠け、やれ入院したの、やれ亡くなったの、やれ認知症がはいったのって、…欠けていくんですよ。チームを組んでリレー式に話すということが不可能になってくる…。最初のうちはみんな話したがらないですね、話していると思いだして。当時のことがフラッシュバックするんですよ。そうすると、もう、涙がでて、涙がでて…講話が続けられなくなる…。そんなことも何度かあってね。そのうちに誰もいなくなって、わたくしも歳をとってね、心臓に毛が生えて（切明さん笑い声）、途中で泣き出したり、つまったりすることもなくなってきたんですよね。いまだに被爆証言を続けておりますが（切明さん笑い声）。

（桐谷：一番最初に話した時のことを覚えてますか？）

一番最初、チームを組んでね、やっていたんでね…、あの、途中までだれかが話したら…、戦前の廣島とか原爆前の様子とかを話して、続いて私が話す、それで、最後に他のひとが核兵器廃絶、平和の大切さのような話をするっていう流れだったんですけど…、私はね、いつも真ん中に挟まれてね、2 番目で、被爆の当時のことを話す役目がまわってくるんですよ…。下級生のひどいけがの様子やら、悲惨な最期の姿ですとか…、私に回ってくるんですよね。私は、それが辛かったんですがね。だんだんね、ちゃんと話して伝えていかなきゃいけないという気持ちも強くなってきてね…。（2018 年 10 月 20 日聞き取り）

以上の証言から分かるように、切明さん自身が証言を始めた当初は、同窓生 2 人とチームを組んで話していた（1982 年には証言をしていた記録がある[13]）。そして切明さんが被爆当時の状況を話すという役回りになったことから、自らの、そして第二県女の被爆体験を語ることになった訳だが、そのことは彼女にとって相当に辛い体験でもあった。

4-4. 証言行為と自身への影響

彼女自身が説明してくれたように、修学旅行生を前にした切明さんの話は直接の被爆体験であり、辛いものであった。では、そのことが彼女の精神と身体とにどのような作用を及ぼしていたのだろうか？

（桐谷：切明さんが最初に被爆証言を始められたときは、やはり涙が出たり、うまくしゃべれないということが起きたのでしょうか？）

はい、ほんとにね…、話していると、当時に戻るんですよね。下級生の悲惨な姿が目の前に鮮明に…、こう浮かび上がってくるというか…。涙があふれてきましてね、言葉がつまって、涙が出て、話せなくなってしまいましてね。「ごめんなさい、ごめんなさい」と皆さんに謝まりましてね、途中で講話をやめてしまったこともあったんですよ。最初は、そんな状態でしたね。

そのうちにだんだん、厚かましくなるというか、心臓に毛が生えてくるというか、話せるようになってきたんですよね。…うーん。そうですねぇ…。周りにね、どんどん話せるひとたちがいなくなっていくんですよね。みんな病気になって亡くなったり、認知症になったり…。そうすると、話さないと、下級生たちのことが闇から闇へと消されてしまうと思うようになりましてね。覚悟を決めるというか、そういう気持ちにもなっていったんですよね。（2018 年 10 月 20 日聞き取り）

彼女はこうも振り返る。話せる被爆者たちが病気になったり他界していく中で、後輩たちの無残な死が「闇から闇へと消えて、なかったことにされたんじゃたまらないなという気持ちでね、なんとか話し出したんですよね」。自分の被爆体験そのものよりも、むしろ無惨な死に方をした後輩たちのために語るのだという気持ちが、被爆証言をすることに応じた切明さんの心境の原点にあったと言える。

4-5. 証言講話の頻度

当初、切明さんが江口の依頼に応えて証言活動をしていたのは、年に 1 回、修学旅行で上平井中学校が訪れたときだけであったという。

修学旅行で来ていたのは、年に 1 回、自分の学生（上平井中学校の生徒）だけを連れてきていたと思います。その後にね、まだ定年にならないうちに（江口先生は）学校をお辞めになってね、広島に移ってこられるんですよ。そして己斐（広島市西区）の方にアパートかなんか借りてね、そこで毎日、毎日、平和公園のアオギリの前に立って、それで生徒さんたちが修学旅行でやってくる、そして、それがバスガイドさんが旗をもって案内する、そのバスガイドさんが碑巡りするわけですよ、それで終わりっていう学校がほとんどだったんですよ。それで、江口先生が付き添いの中学校の先生をつかまえて、「あんたたちはガイドの説明だけ聞いてね、碑めぐりして資料館観て帰る…、それではダメだよ」ってね、「被爆者のかたの話を聞かないと、広島へ来てね、せっかく広島に来た甲斐がない」ってね、説得して回られたの。でも、そのためには、ちゃんと被爆者で、話ができる人のプールを作っておかないと…、被爆者の話を聞きなさいっていって勧めても、ど

こにいるんだ、どうしたらいいんだ、って、皆さんご存知ないから分からないじゃないですか。で、それで、江口先生は被爆者の家をいちいち訪ねてまわって、「子どもたちが修学旅行でやってきたら話してやってくれないか」って言って、頼んでまわられたの。それで、わたくしの家にもみえてね、「それで、話してやってくれ」って仰って…。（2018 年 12 月 14 日聞き取り）

江口が 1986 年に退職して広島に移り、「広島修学旅行」を手伝う活動を開始して以降も、切明さんは証言を頼まれていた。しかし次のような事情で、それは困難になっていた。

4-6. 被爆証言をめぐる自身と周囲の心配

切明さんは江口の要請に応えて被爆体験を証言するようになったが、彼女には二つの困難があった。一つは家事と仕事を両立させていたことによる時間面での困難である。彼女は夫・切明悟の経営する出版社の仕事をしていた。悟は彼女の活動に理解があったが、それでも時間を作ることはなかなか厳しいことであった。もう一つは病気による体調面の困難である。1970 年代末頃から子宮がんと卵巣嚢腫を患った切明さんは、それでも証言をしていたのだが、体調面から証言依頼を断らざるを得ない場面が増えていったのである。

なお、彼女の証言活動に対する周囲からの視線については次のようなエピソードがある。

子どもたちが大きくなると近所のひとたちや親せきがね、私にね、被爆証言をすることに対して「やめた方がいいよ」っていうんですよ。それはね、「あなたが被爆者であることを宣言したりすると、お嬢ちゃん、お坊ちゃんが被爆 2 世ということが分かってしまって、そうすると結婚の障害になる」…。その頃は障害者の子どもが生まれる、とか言われておりましたからね…。私は悩みましてね、長女のね、娘にね、そのことを言って、「お母さん、証言やめようと思う」って言ったらね、娘が「辞めることないよ。私はそんなことでね、私と結婚しないという人とは絶対に結婚しないから、心配するな」といいました…。だからね、「そんな被爆者を差別するようなところにはお嫁にいかないから心配しないで」って。（2018 年 10 月 20 日聞き取り）

この言葉は切明さんの覚悟を強くした。彼女が証言活動を続けることができた背景には、このような娘の力強い後押しがあったのである（なお切明さんには 2 人の子どもがあり、姉と弟のきょうだいである）。

また、語ってほしいと求めて訪ねてくれる人の存在も、被爆体験を語る上で大きな要因であった。

それまでは、ほんとに皆、私なんかでも数えてみたら、69 人（の）親戚身内は亡くなっているわけですけど、そういう話をしたこと（被爆体験を人に向かって話すということ）はないですね。

（桐谷：精神的なダメージがあったのでしょうか？）

確かに、精神的なダメージもありましたね。でも、それよりも、それを話して聞かせてくれ、という人もいなかったですからね。 体験者同士は、お互いに触れてはいけない生傷みたいなものを抱えていますからね。触れると、血を噴きますからね。血を噴くんですよ。ですから、アンタッチャブルでしたね。（2018 年 10 月 20 日聞き取り）

江口が訪ねてくるまでの 30 年間、彼女は被爆体験を語るという機会がなかった。原爆被害について広島のなかで語ることがタブーであり、被爆者同士であってもそれを話すことはお互いの傷をまた開き、「血を噴く」ということになりかねない「アンタッチャブル」なものであったという。ここまでの深い心の傷を抱えていた被爆者が、聞かせてほしいと求める人の存在によって初めて語ることになったという「広島修学旅行」の経験は、とても示唆的である。この点について、切明さんは「ヒロシマ・ナガサキの修学旅行を手伝う会」の通信第 37 号（1996 年 1 月刊）に、江口への手紙という体裁で次のように書いている（この号は江口が広島を去る際に出された号であった）。

ヒロシマを語ることのつらさを乗り越えさせて頂いたのは、先生のお陰であったと感謝しております。先生にお会いしてなかったら、たぶん口を堅く閉じて若い人達にヒロシマを語ることなど思いもつかなかったと思います。ありがとうございました。（中略） 切明千枝子　1995 年 12 月 15 日

江口が病気で他界した後、切明さんは江口を「偲ぶ会」に参加しに横浜まで行った。江口との関係がいかに大切なものであったかがこのことからも垣間見える。

4-7.「広島修学旅行」より後の証言活動

江口の他界後、先述の体調不良などもあり、切明さんは一度、被爆体験証言活動の世界から身を引いていた。しかし、2010 年代に入ってから、再び証言活動を開始するようになる。広島市が募集している「被爆体験証言者」に応募し、2014 年度から広島平和記念資料館から委嘱された「被爆体験証言者」として「被爆体験証言講話」を開始したのだ。この活動は「広島修学旅行」のときとは異なり、年に 1 回ではなく、1 年にいくつもの団体を相手に話す

ものであり、また対象も学校生徒だけでなく、成人の集団も含まれている。さらに、彼女が戦中の学徒動員で一時期勤めていたこともある広島陸軍被服支廠の保存運動が2010年代に広島市内で盛んになったこともあり、そのときの体験について話すことを期待されることも多くなったことが、彼女の証言活動の幅と回数を大きく増やすことになった。

2010年代の切明さんの証言活動では、幼少期を戦争の中で育ち、「軍国少女」として戦争に賛成し、「兵隊さん、戦争に勝ってね」と兵隊たちを鼓舞していた自分にも戦争の責任があると受け止めた上で、「2度と誰にも同じ思いをさせてはいけない」、「こどもたちを戦争に送ってなるものか」という思いで、証言を語り、思いを発信している[14]。

5. おわりに－被爆者の「ホスピタリティ」について

本稿では、東京都の公立中学教員・江口保の「広島修学旅行」と、彼の依頼に応じて自らの被爆体験と級友・後輩たちの被爆体験を語り始めた被爆者・切明千枝子さんの活動の内容や経緯について、主に切明さんの証言から振り返った。切明さん個人の経験を即座に被爆体験証言者全体に適用することは慎む必要があるが、共通する部分の存在を想定することはできるだろう。本稿では、端緒であるかもしれないが、その手がかりを提示し得たものと思う。

その上で最後に検討しておきたいことがらがある。「1. はじめに」でふれた「ホスピタリティ」の問題である。ホスピタリティは観光分野でもしばしば用いられる言葉であり、硬く訳せば「歓待」、柔らかく訳せば「おもてなし」ということになろう。この言葉は例えばホスピタルやホテルの語源ともなっており、それぞれ病人を受け入れる、旅人を受け入れるという他者への配慮＝求めに応じて他者を受け入れるという意味が根源にある。このようなホスピタリティという言葉の意味に立ち返って考えたとき、江口保の求めに応じて被爆体験を語り始めた切明さんの行為はホスピタリティに根差したものであると捉えることも可能である。語ることの苦しさを抱えながらも、拒絶ではなく（ただし当初は拒む気持ちも強かった）、求めに応じて（この場合、誠実な求めであったことにも大きな意味がある）、その希望を受け入れ、苦しみを抱きつつも語るという彼女の行為を、変則的ではあるが他者を歓待する行為と捉えることで、「広島修学旅行」のような特殊な観光におけるホスピタリティのあり様を理解することができる。一般の観光論の観点から眺めたとき、旅行者を快くお迎えする「おもてなし」のように見える場面もあるだろうが、本稿が示した切明さんの経験に即して捉え返すとき、単にそれだけではないホスピタリティのあり様が浮かんでくる。

筆者はこの点を、単なる研究の領域を超えて、広島を訪れ、被爆者の体験証言を聞く人たちに向かっても届けたい。被爆者の歓待は苦しみを含んだ歓待であるということ、しかしそれでもなお、聞くことを（誠実に）求める人が訪ねてくることで初めてそのような歓

待が成立すること。そのような意味で、広島をめぐる観光旅行者は、被爆者の歓待を成立させる重要な構成要素となっているのである。

※本稿は多摩大学グローバルスタディーズ学部地域連携市民講座（2022 年 3 月 19 日開催）にて桐谷が単独で報告した「広島と長崎の観光について」を基に、大幅に内容を追加したものである。なお本稿は、その基幹となる部分を切明千枝子さんの証言に負っている。根気強く筆者の聞き取りに応じ、発言の引用を許可していただいた切明千枝子さんに御礼を申し上げます。また、本稿の基になった講演のときから本稿の仕上げに至るまで多大かつ的確なアドバイスをくださった福島在行さんにも御礼をお伝えします。

注

[1] 山口誠「修学旅行をめぐるツーリズム研究：修学旅行の系譜における「ヒロシマ」」（『二十世紀研究』第 12 号、二十世紀研究編集委員会、2011 年）、山口誠「廣島、ヒロシマ、ひろしま－広島修学旅行にみる戦争体験の変容」（福間良明他編『複数の「ヒロシマ」－記憶の戦後史とメディアの力学』青弓社、2012 年）。また諏訪晃一は、ある小学校の広島修学旅行の参与観察から事前学習の重要性を指摘している（「「ヒロシマ修学旅行」に関する予備的考察」『Συν：ボランティア人間科学紀要』第 3 号、大阪大学大学院人間科学研究科ボランティア人間科学講座、2002 年）。

[2] 加治屋健司「紙の上の観光－『Living Hiroshima』と広島の国際観光地化」（『photographers' gallery press』no.12、photographers' gallery、2014 年、83 頁）。なお両者はともに第 2 次世界大戦のため活動を停止した。

[3] 被爆当時の市長・粟屋仙吉は原爆で死亡し、1945 年 10 月に衆議院議員であった木原が市長となった。なお 1947 年 3 月に公職追放で市長職を退いている。大政翼賛会の推薦議員であったことが理由とされる（浜井信三『原爆市長』朝日新聞社、1967 年、48 頁）。

[4] 『広島新史　資料編Ⅱ（復興編）』（広島市、1982 年）83 頁。なお地の文をひらがなに改め、読点を補った。

[5] 加治屋前掲、83 頁。

[6] 『広島市勢要覧　1948 年版』（広島市役所、1949 年）101 頁。

[7] 占領期には、当時日本に駐留していた米軍や英連邦軍の関係者がしばしば訪れており、観光としての意味合いが強かったようである。またアメリカの有名人の広島訪問としては、1948 年にヘレン・ケラーが、占領解除後の 1954 年にマリリン・モンローとジョー・ディマジオ（新婚旅行）がある。（中国新聞「ヒロシマ平和メディアセンター」ウェブサイトの「ヒロシマの記録」1948 年 10 月および 1954 年 2 月の年表を参照）

[8] 原爆ドーム（旧・広島県産業奨励館）は 1960 年代から保存に向けた取り組みがなされ、1996 年に世界遺産に登録された。なお、この際の正式名称は “Hiroshima Peace Memorial”（広島平和記念碑）である。原爆ドームと観光については、安原有紗「原爆ドームへのまなざしと視る主体の属性との関係」（『日本国際観光学会論文集』第 28 号、2021 年）に詳しい。

[9] 「2022 年 4 月 11 日　広島平和記念資料館の入館者数等の概況について」https://www.city.hiroshima.lg.jp/houdou/houdou/276507.html（2022 年 10 月 22 日最終閲覧）。とくに「年度別総入館者者数及び外国人入館者数」参照。

[10] 財団法人日本修学旅行協会が発行する『修学旅行』の第 10 号（1954 年 11 月）に広島県教育委員会学事課長で同協会広島県支部常務理事の滝口忍郎による広島の修学旅行の状況についてのルポが掲載されており（16-17 頁）、名古屋、大阪、山口、四国、岡山、静岡、九州から

来広する修学旅行生が「年間推計 3 万人は下るまい」としている。また『家庭と教育』1968 年 7 月号（東方出版）の「修学旅行でみるヒロシマ」（33-36 頁）では、修学旅行ではなく社会見学として訪れる中国地方の小学生の多いことにふれている（なお同誌の編集発行人・切明悟は切明さんの夫であり、彼女も同誌の刊行に携わっていた）。

[11] えぐち・たもつ。1928 ～ 98 年。彼と親しかった被爆者たちは敬愛の意を込めて「江口先生」と呼ぶ。江口の経歴や活動については主に江口『いいたかことのいっぱいあっと』（クリエイティブ 21、1998 年）に拠る。

[12] 筆者は 2012 年に切明さんと知り合い、継続的に聞き取りを続けている。このような関係性から、本稿でも彼女のことを「切明さん」と表記する。なお本稿で使用する切明さんの証言は、筆者が切明さんから聞き取ったものである。

[13] 江口保『碑に誓う』（東研出版、1983 年）77 頁に 1982 年の修学旅行日程が掲載されており、6 月 2 日の箇所に「グループごとに 12 ヶ所の慰霊碑へ、各慰霊碑の前で関係者の話を聞く」と書かれ、「④第二県女　切明千枝子さん他」と記されている。

[14] この点については、切明千枝子「被害，加害，そして平和」（『平和文化研究』第 42 号、長崎総合科学大学長崎平和文化研究所、2022 年）および桐谷多恵子「切明千枝子さんの思想とその個人史的背景－講演をより深く読み込むために－」（同前）を参照。

Accepted on 7 November 2022

2023 年 3 月発行の「SGS Bulletin 15」21 ページの英文要旨に間違いがありましたので訂正します。

p. 21 英文 abstract 4 行目
誤 Kriake→ 正 Kiriake